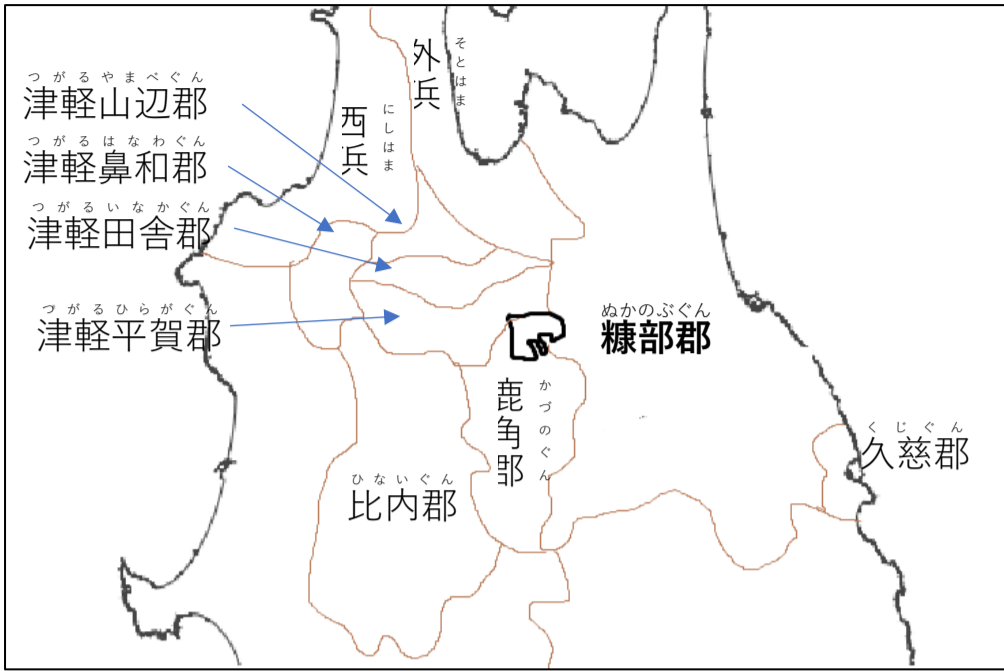


南部家の出自と糠部入部



鎌倉時代の北奥の郡郷制
※参照「新編弘前市通史 通史編 I」一部加筆



甲斐国南部牧(南部町)の位置
※出典:国土地理院地図一部加筆



三戸城・根城・八戸城の位置
※出典:国土地理院地図一部加筆



黒ボク土 クビリト林道の露頭(中志)

1 南部家の出自

平安時代末期の治承4年(1180)

源頼朝と大庭景親ら平家との戦い

(石橋山の戦い)で、源義光の子孫である

加賀美遠光の三男光行が功績を上げ、

甲斐国南部牧を与えられ南部姓を称したといわれる。

2 南部家糠部への入部

鎌倉時代を通して、青森県下は、ほぼ

北条氏の得宗領となる。南部氏は、北条氏

の側近に名を連ねていたことから、甲斐で

培った馬牧の管理のノウハウを買われて、

糠部に所領を得ていたと思われる。

鎌倉幕府が滅びると、根城を拠点として

南部師行と政長兄弟が、南朝勢力の主力

として活躍。しかし、室町幕府に帰順して

いた三戸南部氏が惣領の地位を確立し、

北東北に広大な領土を広げていった。

3 糠部の特徴

北東の冷たい風ヤマセが吹き、コメ作り

には不向きで、台地や丘陵地帯は、火山

灰にササやススキのようなイネ科の植物が

生え、人が草を焼いてできた黒ボク土が広

がっていた。そこは、草原が

広がる天然の良好な牧場と

なった。



なんぶくまき お

南部九牧の起こり



なんぶはんくまき いち
南部藩九牧の位置

※出典：地理院地図一部加筆 ・「東奥馬誌」 廣澤安任編述

1 南部地方は古くから馬産地として有名

(1)奈良時代末は、「狄馬」

(2)平安時代から鎌倉時代は、尾駮の駒・

戸立の馬・糠部の駿馬・七戸御牧の馬

2 室町時代永正5年(1508)、糠部九ヶ所の

牧の馬焼印図が定められ、牧制も整えられる。

3 近世以降も、幕府及び各大家はこぞ
って購入し、その馬政は注目された。

4 正保2年(1645)に十の牧に、八戸藩

分立後の元禄12年(1699)には、南部九
牧となる。

※藩有馬は、「野」と呼ばれる藩有牧場で飼われた。

1 南部九牧の起こり

①相内野：慶長18年(1613)より放牧し、与七郎に代々野守をさせた。

②住谷野：元和元年(1615)藩主南部利直、泉山村の地頭泉山弥七郎に命じて、母馬11頭を精選し放牧させた。

③木崎野：寛永7年(1630)藩主南部重直、30頭の母馬を放し、同18年(1641)小比類巻助右衛門に野守を命じた。

④奥戸野：寛永16年(1639)御野となる。

⑤又重野：正保3年(1646)御野となり、元禄17年(1704)茂右衛門と九左衛門が御野馬別当となる。

⑥大間野：正保3年(1646)御野となる。

享保5年(1720)大間(野守源三郎)と奥戸

(野守四郎右衛門)が一連の牧となり、後、宝暦(1751~)頃二牧となる。

⑦三崎野：明暦4年(1658)別当三光院を野守に命じる。

⑧北野牧：寛文4年(1664)覚兵衛を野守に命じる。

⑨蟻渡野：寛文12年(1672)兵蔵が別当に命ぜられる。

2 宝暦11年(1761)の馬の数

①相内野44頭 ②住谷野31頭

③木崎野214頭 ④奥戸野62頭

⑤又重野86頭 ⑥大間野73頭

⑦三崎野54頭 ⑧北野牧160頭

⑨蟻渡野56頭 ※「東奥馬誌」 廣澤安任編述より



有戸御野普請 (宝暦12年4月土手建設工事)

「南部藩御野馬別当御用留」(一戸五右衛門著)より抜粋



平沼の土手跡 (土壘: 馬よけ土手)

倉内村肝入 孫 八 (印)

平沼村肝入 市右衛門 (印)

鷹架村きも入 平十郎 (印)

有戸御野普請書上覚 (覚書)

一 四百五十間 新規

右八はの木沢頭を釜沢頭迄

一 百九十式間

右八古土手之尻ヨリ木田橋之沢迄

六 六百四十式間

土手高サ六尺根張七尺五寸但一間二付御

人足三人一日式百人積ニ六千九百式拾六人

日数 十日

一 式百間 古土手

右御堀ノ沢方木田橋之所迄御繕式百人二

て一日右御人足

式千百式十六人

日数 十一日

右之通土手積上候新古土手御普請日数十

一日之処此度御差図之上御人足出情仕去ル

八日日取附同十五日迄二日数八日御人足千

六百人二而相済申候 已上

一、はの木沢の先より釜沢の先までの新規の土手450間と古い土手の端より木田橋の沢までの 192間の区間、合計 642間(約 1,167m)、土手の高さは1.8m根張り約2.27mを、1間あたり3人で1日200人、合計1,926人で、10日間作業に従事した。

一、堀ノ沢より木田橋までの土手修繕工事が行われ、1日200人延べ 2,126人の人足が動員され、11日間を要した。

右の積上げ工事も行われ、当初11日間の予定がご指導により8日から15日までの8日間1,600人で完了した。

差出人が各村の肝煎と野守から才藤要右衛門様宛の書状で、才藤から御野守別当の一戸五右衛門へ、前書きの通り精を出して行ったため工事日数が11日で無事に完了したことを報告している。

相違相済申候

前書之通出情為仕御普請日数十一日二て無

才藤要右衛門 様

御野守

兵 七 (印)

吉右衛門 (印)

横浜村

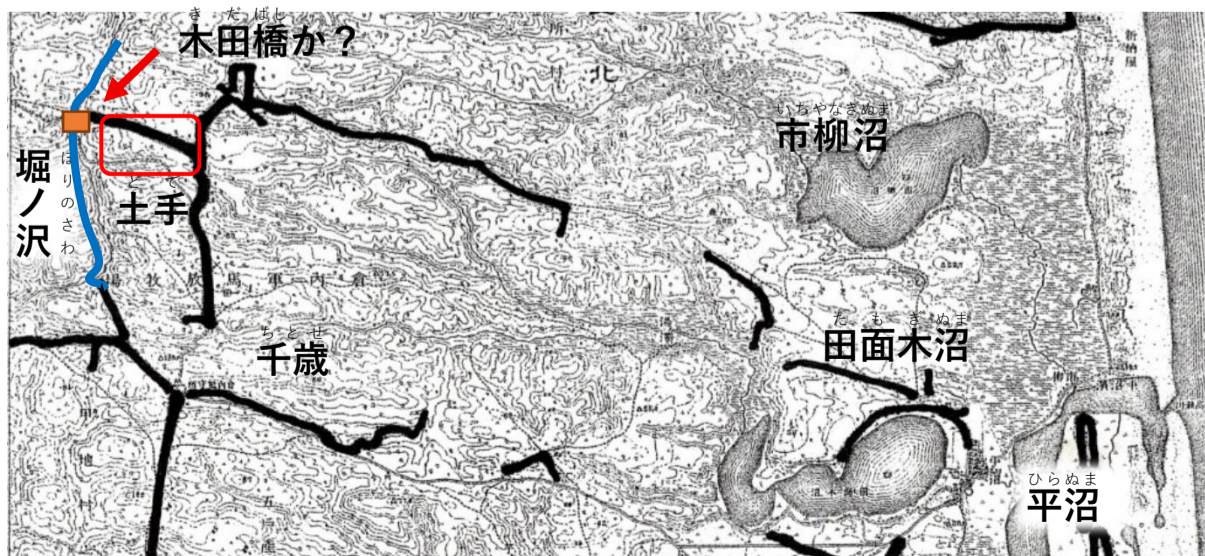
勘十郎 (印)

有戸肝入

各野(各牧場)では、4月に入り野火が行われ、中旬に馬の放牧が始まる。15日は住谷野、16日は相内野、17日は有戸野。同時に新古の土手普請も行っていた。上記の有戸野での土手普請は、土手の長さ計 642 間で、1間につき人足3人、1日につき

200人で合計1,926人、日数は10日。もう一つは11日で延べ 2,126人の工事に、積上げもあった。

春の農作業もあり、村々の負担は、大変なものであったことがわかる。



土手普請の位置 ※大日本帝国陸地測量部「平沼」大正3年(1914)測量、6年発行1/50,000

ろ っ か し ょ ち め い か ん で ん し ょ う

六ヶ所の地名に関する伝承

蟻渡野発端

(略)七鞍打初め申所を鞍打村と唱申候由(略)
元暦年中生食と申名馬出生頼朝公之軍馬二相
成候由鎌倉江牽上候所を泊村門出仕候所を出
戸村尾ブチニ有之候間尾駱村鷹待場の架ノ丈
のごとくなる故鷹架村と申候而東六ヶ村之内
五ヶ村ハ名馬尽之由来を以号申候 (略)

(概略) 蟻戸の牧場のおこり

七つの馬の鞍を打って作っていたところを倉内村
といわれているそうだと。(略)元暦(1184年)の頃、
生食という名馬が生まれ、頼朝公の軍馬となったと
いわれている。その馬を鎌倉へ引いて行ったところ
が泊村。生まれ出たところを出戸村。尾がブチの馬
がいたので尾駱村。鷹待場の架の高さと同じだった
ので鷹架村。よって、東の六つの村の内、五つの村は
名馬に由来した名前の村といわれている。

※生食：宇治川の戦で、佐々木四郎高綱が先陣を切った時の名馬。

「木村文書」より一部六ヶ所村の地名由来の部分抜粋

◆江戸時代に有戸野の野守だった木村家に伝わる「木村文書」の「蟻渡野発端」から、六ヶ所村が古来より馬とのかかわりの強い地域だったことがわかる。※平沼の記載はなし

【考察】地名の由来を、地形の特徴から改めて調べてみた。

- 1 泊は、北海道や沖縄県をはじめ九州にも多く、全国的な分布からすると大和言葉の港を「トマリ」といい、「泊」という字を当てたと考えられる。
- 2 出戸は、広辞苑では、「(東北地方で)山の出入り口。転じて、谷川の下流。」と載っている。地名語源辞典では「本村(尾駱)から新しく独立した村」の意味と書かれている。
- 3 尾駱は、江戸時代に原文「於不知」の「お」ではなく「をふち」と間違っって仮名を振り、「尾駱」の字を当てしまい、「尾が斑の馬」となり、地名も尾駱として定着したらしい。
- 4 鷹架は、昔、高架と書かれていて、「高」と「架」は、「崖や傾斜地」と「～の下」という意味が浮かび上がる。鷹架の集落は、小高い丘の下にあった。
- 5 倉内の「クラ」は、屏風のようにそびえたつ岩壁で、倉内はその「内」側のという意味。「蔵・鞍」の字もある。八甲田の赤倉岳など、クラは山岳用語でよく使われる。